

内モンゴルのモンゴル人社会が直面する課題

～ 沙漠化と二つのグローバル～

ボルジギン・ブレンサイン
(日本学術振興会外国人特別研究員)
(早稲田大学モンゴル研究所客員研究員)

中国における沙漠化の原因をめぐる認識

山羊が罪人（1990年大中頃）

（1980年代以後のカシミア熱 家畜構造の変化 沙漠化の代償を払わされる牧民）

「越窮越墾、越墾越窮」（費孝通1984年）

（貧しくなればなるほど開墾し、開墾すればするほど貧しくなる）

遊牧後進論 定住化政策（1950年代以後）

（漢族文化における夷狄観 北方民族の生き方への偏見が根深い
天然牧草地における放し飼いの放牧に対する否定 定住化）

過放牧（近年）

（家畜頭数の一方的な追求、効率の低い畜産業）

牧畜政策（1982年以後）

（農村地域で実施した請負制度をそのまま牧畜地域で実施し、牧草地使用权の個人分配によって、草原中鉄の囲いがつくられ、家畜を狭い箇所で閉じこめた。）

問題点：開墾入植への反省の不充分、政策への点検欠如

沙漠化問題における人文科学研究の役割、方法

主な役割：

- 1、自然環境の変化は社会環境の変化と同時に捉える事が重要である。
- 2、20世紀後半における牧畜政策を検討し、沙漠化の人為的要素を明らかにする。

研究手法：

戦前の文献資料に対する分析及びそれに対する追跡調査により、20世紀における人間の行為、社会と環境の変化の立体像を探る。

文献の例：

満洲国興安局(モンゴル統制機関)

『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』康徳6年(1939)

『興安西省阿魯科爾沁旗実態調査報告書』康徳6年(1939)

満洲国国務院総務庁統計局(統計データ等)

『興安南省科爾沁左翼中旗第一区二貝子府屯調査報告』康徳3年(1935)

『郷村社会調査報告書統計編』康徳3年(1935)

満鉄産業部、調査部

『科爾沁左翼中旗第一、第五、第六、第七、第九区調査報告』昭和12年(1937)

『科爾沁左翼中旗第六、第七、第九区調査報告統計編』昭和12年(1937)

モンゴル世界における内モンゴル地域

- モンゴル国： 面積156万km²、人口約250万
(中国) 内モンゴル自治区： 面積118万km²、人口2500万 (モンゴル族人口約400万)
(ロシア) プリヤード自治共和国： 面積35万km²、人口105万 (プリヤート・モンゴル族25万)



内モンゴル地域の表土の特徴



ステップの表土の固まり

モンゴルのステップの土壌の断面



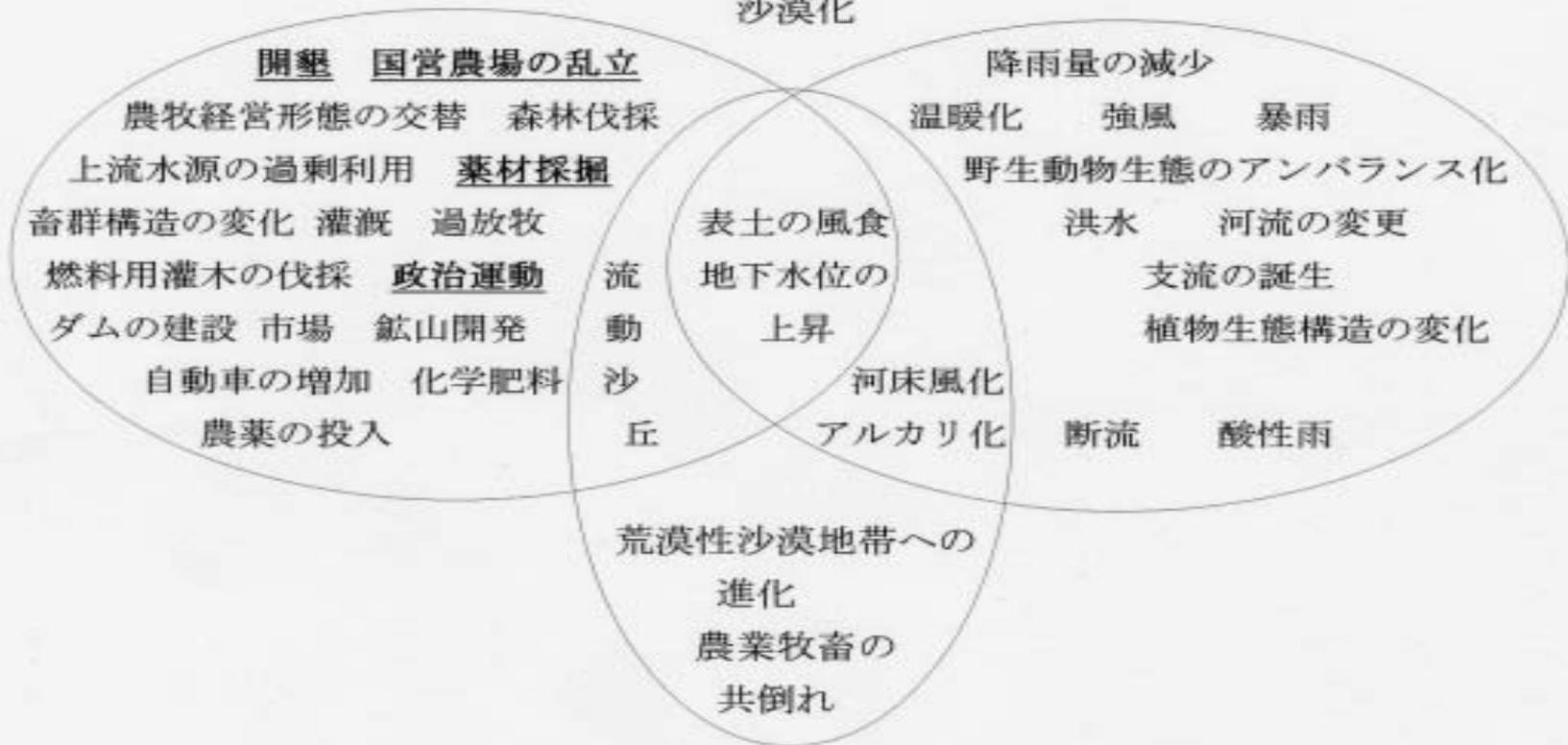


内モンゴルにおける沙漠化を引き起こす諸要素

人為的要素

自然要素

沙漠化



漢人の入植に対してモンゴル人が取った二つの対応

1、漢人に牧地を譲り、絶え間なく北部へ撤退し続ける。

中西部のチャハル・ウランチャブ地域では、モンゴル人は漢人型の農業経営を受け入れることを拒否した代償に広大な牧地を喪失した。その代わり、彼らは自らの生活や文化の伝統の保持にある程度成功した。しかし、これにより人間と家畜が狭い牧地に密集し、所謂「過放牧」を起こす原因にもなった。

2、牧畜経営と伝統文化の犠牲を代償に土地基盤の保持にある程度成功し、農耕モンゴル人村落社会を形成した。

上記と対照的に内モンゴル東部地域では、牧畜経営と伝統文化の犠牲を代償に、土地基盤に執着して、全く別の形で生き残りをはかった。彼らは、漢人型の農耕社会の要素を積極的に取り入れながら、押し寄せてくる漢人社会に対抗できるような定住文化を築くことに努めた。その結果として誕生したのは遊牧の伝統とかけはなれた新たなモンゴル人社会、つまり農耕モンゴル人村落社会である。定住により、半農半牧的な経営形態が形成されたが、徐々に農業の比重が増し、土壌が退廃して、農業と牧畜は共倒れした。

内モンゴル地域における村落興亡史

事例 1) : 赤峰市オンニュード旗 , ハラオボー = ガチャーの三爺府村

村は1924年ころに7戸の属民を連れて定住した一戸の貴族に始まる。

村が開かれた四年後の1928年に最初の漢人苗氏が南部から移住してきた。

当時村には12戸のモンゴル人が居住しており、皆純粹に牧畜を行っていた。苗氏は牧草地の一角に農地を開拓して粟やトウモロコシを栽培し、同村の農耕の歴史を開いた。

1947年に共産党による土地改革が行われるまで村には漢人は苗氏一家だけだったが、土地改革の後ほぼ毎年1, 2戸の移住民が南部地域からやってくるようになった。

漢人移住民の増加は出生率を急速にあげ、人口の増大によって村周囲の牧草地が農地と化していった。

1957年には6戸のモンゴル人が牧畜を営むために隣村へ転出していった。

入植と開墾の結果 :

現在同村を含むバガタラー = ソム全体の植物被覆面積は総面積の僅か7-8%である。

村周辺の牧草の高さは1952年に40-50cmあったが、50年代後期には30-50cm、60年代には20-30cmと急速に低下し、1978年以降になると草は殆ど生えなくなった。

現在村の家畜はほかの村の牧草地を借りて放牧している。

降雨量の減少も大きく、年間降雨量は1952年に460mmあったが、70年代には370mmにまで減少し、80年代には300mmに下がった。

1980年代後半になると、村では出稼ぎによる転出者が増大していった。連年の凶作によって村の半分以上(72戸のなかから43人)の労働力が出稼ぎに行くか、または親戚を頼って遠くへ働きに行っている。そのうちモンゴル人二人の青年が隣村で牧畜に携わっているほかは皆都市部で非農業的な業種に従事している。

入植民の二世たちは農地開墾に夢を抱いていた親の世帯と違って、この土地に失望しはじめた。興味深いことに、村のモンゴル人は子孫をなお牧畜を盛んに行っている地域へ送り込みがちであるに対して、漢人は子孫を都会に送り込み、農業以外の業種に携わらせていることである。

事例2) : 通遼市ホルチン左翼中旗, バヤンタラー農場第6隊(旧二貝子府屯)

村の形成史

1850年頃に王様の前妻が定住したことで村落の歴史が始まる。

1935年に同村は71戸, 512人の人口を持ち, そのなかに本旗モンゴル人が45戸320人, 外旗モンゴル人は22戸170人, 漢人は4戸20人おり, それ以外に使用人など49人がいた。

現在, 村には139戸, 562人の人口がある。そのうち漢族は8戸あり, 1947年の土地改革より以前に移住してきた漢人彭氏の子孫は既に民族をモンゴル人に改めている。

50-60年代以後に転入してきた漢人6戸は皆犯罪を起こして近くの国营農場で受刑労働をし, 刑を終えた後, 政府の配属に従って同村にきた人たちである。内モンゴル以外の地域で犯罪を起こした受刑者が, 内モンゴル各地に設けられた農場・林場或いは「労改農場」と呼ばれる専門の服役所で服役し, 刑期が満たされた後服役した地域の周辺に配属されるケースは同村に限る現象ではない。

80年代以後の変容

村の総面積は25000ムであるが, 現在(1999)農地は4900ムあるに対して, 有効的な放牧地は約2000ム残されているにすぎない。

しかし13年前の1987年頃には農地が僅か1050ムあり, 有効的な放牧地は12000ムもあった。この僅か13年の間に, 同村における牧畜と農業の比重はこれほど大きく逆転したのである。

現在村の土地の多くは流動砂丘と村基地及び農地で, その周辺は放牧不可能地となっており, しかも1999年だけでも500ムの農地を新たに開墾した。そのうえ, これにともない村の家畜は現在, 馬300頭, 羊400頭, 牛120頭保有するにすぎない。

村は今まで位置づけられてきた「牧畜を主とする村」の経営形態より, 「農業を主とする村」の経営形態に急激に変化しつつある。

農業中心主義の政策の点検 国営農場の乱立

1950年代以後における建設兵団の設置

国の幹線鉄道（包頭－蘭州鉄道）などを守る為に沿線の沙漠化地域で安置する。
樹は植えましたが、農地も多く開拓し、改革以後そのまま農民化した。
行政権限は旗や県に準ずるもので、地方行政の指導を受けずにいられる。

その他の国営農場・林場

一つの旗や県に一つ以上の国営や地方経営の農場・林場を設置した。
国営林場は山や森を囲んで、地元の家畜を追い出したが、囲いの中で自分たちが
開墾したり、家畜を飼育したりする。
絶え間ない農場・林場と地元の対立。

薬草採掘などによる土壤破壊

髪菜

内モンゴル中西部の草原で育つ植物である。高い栄養価値がある以外、「髪菜」という中国語の発音が「発財」（金持ちになる）という言葉と同音により、中国では有名な料理になってきた。中国では、現在最も荒廃が進んだソニト（蘇尼特）草原を中心とする内モンゴル自治区中西部が最大の産地である（甘肅、寧夏）。



1キロの髪菜を採掘するには広い範囲の牧草地を掘り起こし、採掘に使う鋭い熊の手で別の草の根まで尽く掘り出してしまう。

1キロの髪菜が数百元にも売られ、人口僅か30万人の寧夏回族自治区同心県では毎年20万人にも上る人が内モンゴル自治区へ出稼ぎに行って髪菜の採掘を行っていた。

内モンゴル自治区では近年まで毎年約1.5万キロの髪菜を買い取り、多い年は3万キロにも上っていた。1980年代頃から1990年代頃までの僅か10数年の間に、保守的な統計でも約200万人を超える農民が内モンゴル地域で髪菜を採掘し、毎年、アラシャン盟に入って髪菜を採掘する人も約10万人に達していたと言われている。それにより内モンゴルでは約2億畝（ムー）に上る面積の草原が重度に荒廃し、半分以上の草原が完全に沙漠化した。

内モンゴル自治区シリングル盟のソニト右翼旗では70年代から地元の遊牧民と髪菜採掘に来た外地の農民との間にトラブルが続発してきたが、約二年前からソニト草原では真夏も草を生えなくなり、真冬の12月から砂嵐が起きるといった事態が起きている。

国務院が髪菜の採掘販売禁止の法案を出したのは2000年のことである。

現在ソニト草原の牧民は「生態移民」というプロジェクトによって故郷を離れざるを得なくなっている。それにより、モンゴル人のコミュニティが崩壊される危機に瀕している。

髪草と同じように漢方薬の材料となる薬草も内モンゴルでは多く掘られた。そのうち典型的な薬草は甘草である。甘草は根が深く、それを掘ると草原の生態が急速に退廃する。甘草は漢方薬以外に醤油の生産にも使われていると言われる。

まとめ

- 1、内モンゴル地域に対する度重なる牧地開墾が当地域における現在の沙漠化問題の根底にある。農地の退廃はもとより、過放牧現象の裏にも開墾が存在する。
- 2、放し飼いの牧畜に対する政策の過ちが存在するが、それに対する点検や反省が見られない。例えば、牧草地の分配など。
- 3、自然資源への略奪的経営、例えば薬草などの採掘が乾燥ステップの退廃を直接もたらした。
- 4、上記の問題点に関する反省が充分行われぬ限り、沙漠化の責任と犠牲を原住民に負わせられ、教訓を正しく吸収することができない。